第　2　回

円山動物園リスタート委員会

会　　議　　録

第２回　円山動物園リスタート委員会

１　日　時　　平成１８年7月２５日（火）１３：３０から１５：３０
　　１５：４５から園内視察、円山公園木道視察
２　場　所　　円 山 動 物 園 内　　動 物 園 プ ラ ザ

３　出席者　　委　員：大川直子、大谷薫、岡田典子、きくち美由紀、小林廣司、小宮輝之、高木晴光、服部信吾、原はるみ、原田昭、山本光子
　　（欠席）斉藤英昭、笠康三郎

　　事務局：円山動物園園長、種の保存担当部長、管理課長、飼育課長　ほか

４　議　事
　（1）　議題抽出と改善策について
　（2）　次回議題と日程調整

１．開　　会

○**原田委員長**　それでは､第２回の円山動物園リスタート委員会を開催したいと思います。まず、きょうの出席者の確認をしたいと思います。

○**金澤園長**　きょうの出席者は、斉藤委員と笠委員からそれぞれ欠席する旨の連絡がありました。また、小宮委員が、もう少ししたら着くかなと思います。今の時点で１３名中１０名出席しておりまして、本委員会の設置要綱第５条に該当しておりますので、会議は成立しております。

○**原田委員長**　ということでございますので、進めさせていただきたいと思います。
まずは、資料の確認ということで、園長からお願いします。

○**金澤園長**　それでは、資料の確認をお願いしたいと思います。

本日の資料は、お手元にお配りしてございますいろいろな資料と、先日お送りさせていただいた分がございます。

本日の資料としましては、会議次第、座席表、それから事前に配付しております資料１から３、それから、カラー刷りでさっぽろ円山動物園だより、化石探検学覧会がございます。このほかに本日お配りしておりますのは、資料６の動物園の課題というものです。それから、資料７の飼育動物のコンセプトづくり、資料８の円山動物園来園者の満足度調査というものがございます。それから、きょうお手元にお配りしている中に資料２につきましては、事前にお送りしておりますが、お送りした後、データの補強ができましたところがありますので、差しかえをさせていただきたいと思います。

なお、黄色い袋の方には、８月３１日までＪＴＢの方で開催しております化石探検学覧会の招待券もございますので、もし時間があれば、８月３１日までやっておりますから、一度ご見学願いたいと思います。

配付漏れ等がございましたら、お知らせ願いたいと思います。

以上でございます。

○**原田委員長**　ありがとうございました。

ちょっと順序が逆になりましたけれども、前回ご欠席で、きょうご出席という方が大谷委員と高木委員の２人でございます。このリスタート委員会での動物園に対する思いも含めまして、簡単に自己紹介をいただけますでしょうか。

○**大谷委員**　大谷薫と申します。

最初から欠席して済みませんでした。

私は、中央区でカフェギャラリーを経営して、それから札幌学院大学の非常勤講師もしております。

関西出身で、札幌に来て１０年です。動物園には全く縁がなくて、１０年間で３回しか来たことがないのですが、そのうちの１回は旭山動物園です。すみません。円山は、先週のカルチャーナイトで、その前は数年前に一遍来たという者です。

どうしてここに呼ばれたかというと、高木委員もご一緒させていただいたのですが、お

ととしに藻岩山の魅力アップを考える会に入れていただいて、そこで藻岩山の日という発案をして、それが採用されまして、お金のかからない案をよくぞ出したということで、その一発ヒットでスカウトされたのではないかと思っております。

○**高木委員**　高木と申します。よろしくお願いいたします。

ＮＰＯ法人ＮＥＯＳという団体を主宰しています。

常勤のスタッフが十六、七名いまして、本部は札幌のすぐそばにあるのですけれども、道内に４カ所ばかり拠点をつくっていまして、都市と農山村、国立公園の中にもあるのですが、交流事業のソフトづくりを企画、実施している団体でございます。

動物園は個人的に非常に好きで、パスポートも持っておりますが、余り来ていなかったので、これから事務所に来るたびに通いたいと思っています。

よろしくお願いいたします。

○**原田委員長**　ありがとうございます。

２．議　　事

○**原田委員長**　それでは、早速、議題に入らせていただきます。

議題の１は、きょうは課題抽出と改善策についてというテーマで皆さんからいろいろご意見等をいただきたいと思います。

まず最初に、先ほどご説明がありました各種資料に沿いまして、園長の方からお話をいただきたいと思います。よろしくお願いします。

○**金澤園長**　それでは、課題抽出と改善策についてということで、私の方からお話をさせていただきます。

きょうお配りしております資料の中で､最初に資料６をごらんいただきたいと思います。

大ざっぱではございますが、縦軸に重要性の検証ということで、重要性大というのは、やる必要があるだとかやらなければならないものというくくりになろうかと思います。小の方は、やる必要がないものと簡単に分類できるのかなと思っています。横軸の方は、困難性の検証ということで、大は実施困難とかできないもの、小の方はすぐ実施できるものという分け方にしていっています。

その結果、大まかに四つにグループ分けができるのかなと思います。

一つには、左下になりますが、動物園ではやる必要がなく、実施できないと思われるものについては、無理しないで撤退すべきものというくくりをつくったわけです。

二つ目には、その右隣になりますが、動物園ではやる必要がないが、すぐにも実施できるものは撤退もしくは考え直すことも必要ではないだろうかというくくりでございます。

三つ目は、その上になりますが、動物園としては当然やらなければならない、かつ実施が容易なものは､逆に言うとだれに言われることなく当然やるべきではないか｡ですから、すぐにでも実施しようというくくりがあるのかなと思います。

四つ目が、課題と書いてありますけれども、動物園としては当然やらなければならない

が、実施がやはり困難と思われる、または一定の条件が整えば実施できるというのを、今回は課題と位置づけて整理してみました。

次に、動物園の主な検討課題ということで、そろそろ本題に入っていきますが、第１回のときにもちょっと説明させていただきましたけれども、大まかには基本構想レベル、経営戦略レベル、施設整備計画レベル、アクションプランレベルの四つ、それに、実際に動物園は動物がいなければ動物園にならないものですから、飼育動物の課題、この五つに分類できるというお話をさせていただきました。

それで、本日の資料１に戻っていただきたいと思います。

これは、事務局が本当のたたき台としてご利用いただけるように、一たん、我々事務局の方で勝手に整理したものでございます。この表では、一応、五つのレベルをさらにグループ分けしまして、項目を抽出し、第１回委員会での発言などを検討欄に記載させていただきました。

それで、一つずつちょっと簡単にお話をさせていただきたいと思います。

一つは、基本構想レベルでは、動物園の定義や位置づけを整理するため、動物園の役割、コンセプト、それから円山全体というエリアのまちづくり、それから環境教育、種の保存、産学官や市民との連携といったグループ分けをしてございます。ここでは、大都市の動物園は動物図鑑化し、個性を出しにくいとか、駐車場の問題、新たな提案としては歩行者天国や交通ハンプなどの意見がございました。

それから、基本構想を実現して、経営の視点を踏まえた経営戦略となるのが経営戦略レベルということになりまして、裏側のページになります。

ここでは、基礎収支構造、増収対策、コスト削減、集客対策、広報戦略、魅力づくり、組織体制にグループ分けされております。そして、ここでは動物園が自立していくための方向性や売上の現状分析、それから高齢者は有料でもいいのではないか、団塊世代やシニア層をターゲットとした取り組み、それから、お父さんが来たいと思うような動物園、それから動物園動物サポーター制、夜間動物園とか冬の動物園といった新しい提案や意見が出されておりました。

３点目は、その次のページになりますけれども、施設整備計画レベルの欄でございます。

ここでは、園内の動物舎とか管理施設や関連する施設についての整理をする考え方です。

ここでは、修繕計画とか施設整備、さらに園内にありますキッドランド、駐車場、食堂や売店などにグループ分けしてみました。この部分につきましては、もう少し議論が先になる部分ではありますが、現在の動物舎の年間維持経費や、修繕項目、それから移設したり新築した場合に必要となる今ある施設の解体費を概算で一応見積もって検討してみたいと思っています。

そして、ここでの意見としては、駐車場の立体化を図ったらどうだろうか。特に、きょうのように野球の決勝戦となると、実はもう満車なのですが、まだ表に車が並んでいる状態です。そういった意味では、動物園の駐車場ではないのですが、もう少し駐車場を広く

するともう少し稼げるかなという視点だと思いますが、そういった点から駐車場の立体化の問題が出されておりました。

その次になりますが、アクションプログラムのところでございます。

ここで、アクションプログラムは実施計画になりますので、基本構想とか経営戦略後の議論となる部分です。ただ、全体を考えていくときに、ここにも触れておかなければならないということで整理したものですが、魅力づくり、イベント、企業協賛、札幌市役所内の連携の四つにグループ分けしました。この部分は、今申し上げましたように、もう少し先になりますが、整理だけして、今回、提出した次第でございます。

最後に、動物園の根幹となる飼育動物の問題でございます。

１回目にもお話をさせていただきましたが、円山動物園では、動物だけでも約２００種、１，０００点を飼育展示しておりますので、一応の物差しというか、判断基準を設けて整理しております。それが、資料７の飼育動物のコンセプトづくりというものでございます。

この中では、将来、動物の獣舎を広げたり、動物の活動する面積を広げたりという議論になってくると、限られた面積の中で全部クリアするということはちょっと難しくなっていきますので、場合によっては飼育動物の選択と集中が必要になるのかなと思いますので、そういった視点からもちょっとコンセプトというか、物差しをつくってみました。

それで、Ａの生息域・種別といいますのは、例えば寒帯、温帯、熱帯という区分、あるいはオセアニアとかアフリカといった地域別の区分を意味しておりまして、ある種のゾーニングをイメージした考え方でございます。

それから、Ｂの目的・役割別は、環境教育や種の保存といった目的別に整理する動物を区分けしましょうという考え方でございます。

それから、Ｃの価値・体験は、まさに今いろいろな方から求められておりますが、ふれあいなど来園者に体験や感動を持ち帰っていただけるような視点から見た分野を整理しております。

そして、Ｄの伝統・歴史・経験・原点というのは、動物園は５５年の歴史を持つわけですから、ここで経験や伝統を踏まえた動物園に対する品格や品位を構成するものだと思っています。そういった意味で、こういう整理をさせていただきました。

ただ、最終的には、Ａ、Ｂ、Ｃ、Ｄと四つに分けましたが、この４種の分類方法を総合的に組み合わせるということになろうかと思います。そういった意味で、一応の物差しを判断基準として整理したものでございます。そして、希少動物の繁殖とか高齢動物の死亡後の対応などといったくくりを整理したものでございます。

それが、資料１の一番最後に飼育動物の課題というところがありまして、ここで整理してございます。希少動物の繁殖、現行展示方法における課題、繁殖制限動物、それから、今実際にあるのですが、空いている檻の解消問題、動物にかかわるイベントの充実、野生動物を保護したり、野生復帰させるといったグループに分けております。これらの項目や解決策は、この動物に関しては動物園の飼育員がそれぞれの動物ごとに課題や解決策を整

理して、まとめて、今回提案しております。

これらをベースに、資料２の展示動物飼育計画というものをご覧いただきたいと思います。

この表は、動物園で現在飼育しております動物をその施設ごとに整理したもので、飼育数、繁殖の可否、人気度、それから入手困難度を整理したものでございます。

例えば、一番上にあります猛禽舎、オオワシというのがございますが、これだと繁殖数は５羽で、繁殖は可能、そして人気も高いが、愛称はついていない。そして、入手も容易で飼育もしやすいということで、丸、バツ、二重丸の表現はそういうことになろうかと思います。

それからもう一つ、裏側のページですが、熱帯動物館のアジアゾウのところを見ていただきたいと思います。これは、先日、還暦のお祝いをやったところですが、アジアゾウの飼育数は１頭で、１頭ですから当然繁殖は不可能、しかも高齢ということで不可能でございます。ただ、人気度も高いし、愛称もあります。ゾウというのは、入手困難で、かつ飼育も難しいということになっています。

このように、各動物ごとに整理しておりまして、今後の検討の中で、動物の見せ方や飼育スペースなどを検討する段階にはこういったものが利用されるのかなと思っています。

ここでも、先ほど申し上げましたような選択と集中という判断が出てくるのかなと思います。

もう一つ、資料を説明させていただきたいと思います。

きょうお配りした資料８、円山動物園来園者の満足度調査というものがございます。

これは、１回目に笠委員から、入園者はどんな交通手段なのか、どこから来たのか、利用者の実態調査をこれからしないのかという意見がありました。それで、私どもの倉庫の中を探しますと、比較的新しい資料が見つかりました。２年前の２００４年に入園者を対象に実施した調査データが出てまいりまして、本日配付した次第でございます。

簡単に調査概要を説明させていただきます。

この目的は、２００４年は、ちょうど傾向として２年続けて来園者が減ってきた時期だったものですから、そういった落ち込みが出てきたということで、園内の施設や園内でのサービスに対する満足度調査を園内で実施しよう、そして、その改善策を検討するために来園の目的、園内での施設、サービスの印象、改善項目などを、２００４年７月２１日から９月６日までの約５２日間、園内で調査を実施しております。

その結果、６，８００人から回答が得られまして、それを整理したものがきょうお出ししたものです。

この中で、何点かポイントを申し上げたいと思います。

３ページの表１－５ですが、回答者の属性というか、どこから来たかという意味では、市内が５４％、道内３１％、道外１３％ということで、半数が市内を占めています。８５％が道内ということで、道内といってもきっと札幌近郊ということになろうかと思いますが、

そういったところからの来園者です。

それから、次のページの交通手段としましては、一番上にありますが、自家用車とバス合わせますと６８％で、その下は地下鉄とバス、あるいは徒歩ということになりますが、要は地下鉄利用者は１８％となりまして、ここの動物園に来られる方の大半は車で来られておりまして、車主流ということになろうかと思います。

それから、７ページですが、ここでは人気施設について聞いております。人気施設と不人気の施設を聞いているのですが、単純に５番目までは左側に各施設ごとに、次は一番おもしろかった施設、それから次がおもしろくなかった施設という凄い大胆なくくりで整理されておりますが、おもしろかった施設の５番目までを紹介しますと、熱帯動物館、こども動物園、サル山、海獣舎、遊園地の順になっております。反対に、おもしろくなかった施設ということで、人気がなかったということになりますが、昆虫館、熱帯動物館、熱帯植物館、それから遊園地、類人猿館という順になっております。必ずしもきちんとリンクはされておりませんが、その人の見方によってすごく人気、不人気というのはあらわれているのかなと思います。

それから次に、飛びまして１１ページをごらんください。

今のは施設の問題でしたが、今度はサービス面での印象を聞いております。特に、１１ページの下の方で見ていただきたいと思いますが、ここは印象のよし悪しを聞いたところでございます。

よいところでは、入り口や受付での対応、要は受付の部分ですが、その対応がよかった。それから、園内の手入れ、トイレ等の掃除、遊園地、園内職員の対応という順番になろうかと思います。そして、悪いところとしては、対応というか印象ですが、食堂、トイレ等の清掃、動物環境、遊園地、ボランティアという順番になっております。このように、よいと評価された順番の低位が悪いとは評価されていないということで、必ずしもきちんと整合はとれていないようですが、ただ言えるのは、受付はどちらのよい方からも悪い方からみてもいいという結果が出ています。ただ、食堂はどちらから見ても悪いという評価になっているかなと思います。

それから、１２ページでございます。

これは、これから動物園にどういったことを期待して、どういったところを改善していったらいいかという問いかけです。その中で、表６－１、改善を期待する事柄の右側の方を見ていただきたいと思いますが、最も改善が必要な項目というものがございまして、ここで第１位に挙がっているのは動物の見せ方、そして２位が動物のにおい、そして古い施設、トイレの問題、食堂という順番になっております。１から３までについては、動物園側のソフトなり、その準備ということになりますし、トイレの問題は環境をもう少し考えなければならない。ただ、そういったソフトなりハードで整理がつくのですが、この食堂のところになると、動物園だけではなくて、逆にここの園内で企業活動されている方の協力ということになろうと思います。

これが、今日お配りした資料８の説明でございます。

以上で、今日お配りした資料の説明を終わらせていただきたいと思います。

○**原田委員長**　ありがとうございます。

かなり情報が多い内容を短時間でつくっていただきましたのですが、事前に目を通されていると思いますので、早速、今のようなご説明をいただきまして、きょうは課題についてそれぞれご意見をいただきたいと思います。

今日は、まとめとして、こういうことだったというふうに締めくくりをいたしませんので、ご自由に、それぞれのお立場からこういうところが課題ではないかという重要な順からご意見をいただければと思います。

今日は、特に順序というか、検討課題の基本構想レベルからという順序でやった方がいいですか。それとも、それぞれ皆さん方のお立場から、私はこういうことが課題であるとお考えいただいている内容をご発言いただいた方がよろしいでしょうか。

何かご意見はございますか。

○**服部委員**　検討課題、大変重要な問題だと思います。そういった意味では、基本構想レベルから一つ一つ皆さんのご意見を伺った方が絞りやすいと思います。

○**原田委員長**　ただ、時間が余りありませんので、途中でここまでしかやれなかったという感じになるかもしれませんけれども、そういたしましょうか。

○**服部委員**　最もベーシックな部分で、ここも押さえておかないと次に進めないのではないかと思います。

○**原田委員長**　それでは、今、そういうご意見が出ましたので、円山動物園の主な検討課題のリストのレベル並びにグループというところから始めていきたいと思います。

それではまず、基本構想レベルの動物園の役割グループということで、私はこのように思うというご意見ございましたら、どなたからでもお願いしたいと思います。

この資料をごらんになって、上野動物園では動物園の役割というのはどういうお考えなのでしょうか。

○**小宮委員**　昔から、役割というと、僕は動物園に入ったころに四つ言われていました。レクリエーション、教育施設、自然保護の役割、研究、この四つが動物園の役割だと習ってきました。ただ、レクリエーションというのは当たり前になっていたり、反対に研究とかというのは日本では遅れたりしていたのです。その中で、自然保護というのは余りにも話が大き過ぎて、何をやるのかなと思ったときに、最近はっきりしてきたのは種の保存、特に野生で危なくなった動物を助ける仕事と環境教育です。これは教育とか研究というものにもつながるのですけれども、種の保存と環境教育で動物園の役割を果たせるというのは、上野というより、世界的な流れとしてそういうふうになっています。

そういうものを押さえながら、レクリエーション施設だったり、教育施設だったり、自然に楽しみながらそういうことができるというのが動物園の理想だと思うのです。博物館や美術館といったいろいろな社会教育施設がありますけれども、お客さんを集める量とい

う意味では、それから、いろいろな方が来られるということでは、東京でもほかの施設より非常に多いわけです。だから、そういうことを多くの人に発信する、伝える場だという考えです。

○**原田委員長**　ありがとうございます。

　そういう四つの役割というものが基本になっているということです。ただ、種の保存という問題については、実際にこの役割を表現していく、あるいは入園者の方々と動物園との間でそういうコミュニケーションを取り交わすということはなかなか難しいような印象を持つのですけれども、副園長、その当たりで何かお考えになっていることはないでしょうか。

○**大谷種の保存担当部長**　今、小宮委員が言われたように、四つの役割というのは切り離せないもので、私は種の保存担当ということになっていますけれども、特に子どもたちには、種の保存というより自然環境が大事だということをわかってもらうために、まず動物に触れてもらって、同じように生きているのだということを最初の段階として感じてもらう。そして、もう少し学年が高くなったら、人間との違いとか、動物それぞれが生きている環境を考えてもらって、うちであれば、ピリカはかわいいなと思っていただくときに、彼らが住んでいる北極の氷河は今少なくなっているとか、そういうことを何とか発信していきたいということです。ですから、種の保存といっても、動物園の中の活動としては、血統登録とか、いろいろな希少種の繁殖ということに取り組んでいますけれども、周りの人たちに対しては、うまく言えないのですけれども、自然環境を守るということを発信し続けるということがすごく必要だと思っています。

　うちの動物園でも、出前講座などを頼まれる場合には行ってやっていますけれども、小学校に対しても、飼育員が直接、いろいろな動物の飼育に関するお話とか、動物園に来る前に事前の情報としてどんどん発信して、興味を持ってもらうという取り組みをしたいと思っていまして、今年度から徐々に始めているところです。

○**小宮委員**　ちょっと言い足りないところがあったのですけれども、種の保存、例えばアフリカのチンパンジーとかゴリラとか、寒いところでやる必要性があるかという話もよくありますが、今、世界の傾向としては、種の保存、希少種は各一つの動物園がすべてを守り切れるわけではなくて、世界じゅうが協力してやっていく、だから血統登録などをやっているわけです。

　それとは別に、各園ができることを一つずつでもやってくれればという話ですが、よく域内保全と域外保全という言葉があります。域外保全というのは、生息域外の保全であって、まさしく動物園で動物をふやしているのは域外保全なのです。域内保全というのは、生息域内での動物や自然を守ることで、今、動物園の種の保存、希少種をふやすような仕事、つまり域外保全が域内保全とリンクしていなかったら価値がないという考え方です。そうすると、非常に大きな話になってしまって、世界じゅうの動物園が、特に地元にかかわるような域内保全に貢献できる種類に対して、各園が一つずつぐらい責任を持ってくれ

ると、例えば日本でも百六十幾つ動物園、水族館があって、１６０種類のことについて、あれに関してはここに聞きなさいという形で、それはどちらかというとキリンや象ではないのです。それは隣の山にいるクマゲラかもしれない。反対に言うと、クマゲラのことに関しては札幌に聞けば全部わかるということで、クマゲラの域内保全活動している人たちとの連携で、例えば保護になったときに、場合によってはここで繁殖まで試みられるかどうかも含めて、域内保全活動としてこの地域の動物を何かやると。

例えば、富山の動物園は、ホクリクサンショウウオという小さいサンショウウオが園内にもいるのですが、あそこにしかいないのです。そのかわり、ホクリクサンショウウオのデータに関しては、富山の動物園のデータが世界一なのです。というのは、そこにしかいないから、よそが持っているわけがないのです。そういう意味で、域内保全活動に貢献できる域外保全活動を自慢できるようなことを一つずつ動物園が持とうよ、という雰囲気があります。逆に、そういうものを持っていないと、地元や動物園界からも尊敬されないというか、遊園地的なことだけやっているのかなと思われてしまう。だから、ここにいろいろな動物が出ていますけれども、象やキリンではないのです。市民に対してそういうものを見せるのも必要ですけれどもね。

○**金澤園長**　今、円山が取り組み始めたのは、円山動物園のそばに川があって、昔、ニホンザリガニがいたらしいのです。今もそれが捕獲できるのです。それを、今、育てようかと。それから、オニヤンマ、トンボの大きなものです。それとかもう一つは、オオムラサキを今やってみようかということで、幼虫というか、幼生を集めて飼育を始めたところです。それを少し市民に見せながら、かつ野に放せるかどうかをちょっと検討しようかと思っております。

動物の方では、北海道だと、札幌にオオワシなどがいますので、そういったことがこれからできるかどうか、今まさに取り組むところです。

○**原田委員長**　なかなかすばらしい話だと思うのです。

私たちが動物園に行くと、珍しい、身の回りにいない、その地域にいないものを見たいというふうに思いがちなのですが、やはり種の保存という観点から見ると、その地域に適応した種をきちんと保全していくという必要性が今問われている、叫ばれているということではないかと思うのです。確かに、小さいころにいたいろいろな虫や動物を、最近は身の回りで全然見なくなってしまったというようなことがあるわけです。それをきちんと動物園が保全していくということは、非常に大きな任務でもあるのではないかと思います。

それからもう一つは、この前、大谷副園長が新聞に書かれていたように、いろいろな動物の繁殖の仕方、あるいは子育ての仕方というのは、みんなそれぞれ異なった世界を持っている。我々は、赤ちゃんを育てるということと、非常に一元化した考えですけれども、いろいろな育て方があるのではないかという世界を新聞の記事から教えてもらったような気がするのです。そういう意味での種の保存というような見方もあるのではないか。だから、動物園でのいろいろな動物の子育ての仕方みたいなものを見せていくというか、ここ

が違うのだよというふうに教えていくというような見せ方も必要なのではないかと思います。

それでは、この動物園の役割についてはそういうことで、次に進んでよろしいでしょうか。

（「異議なし」と発言する者あり）

○**原田委員長**　次は、コンセプトというところです。

これは話せば長くなりそうなテーマでございますが、ここに書かれている園内の展示コンセプトで、ここはというようなご意見がありましたら、どうぞ発言いただきたいと思います。

○**高木委員**　今の役割に関連すると思いますけれども、僕は、子どもたちと接して自然教育をすることを仕事にしています。そのときに言うのは、北海道、特に札幌というのは、これだけの人口がいる世界でも大きな大都市であるにもかかわらず、野生動物の大型のヒグマとか、ニホンザリガニの話もありましたけれども、とても身近な動物からヒグマのような大きな動物もいることに対して、子どもにも大人にもそうですが、そのアピールがすごく薄いと思うのです。

円山動物園の特徴は、日ごろの生活と北海道の野性性が非常に近いところにあるというものをもっと打ち出してほしいなと思うのです。北方圏の生き物、北海道という北方にいる生き物がみんなわかるみたいな、そういうようなものがとても欲しいです。うちに遊びに来る子どもたちも、エゾサンショウウオを本当に見てびっくりしていますし、オタマジャクシを見てもびっくりしているのですが、実は豊平川の上流にだったらいるわけです。そういうところを子どもたちに植えつけられるような展示コンセプトを、ぜひ大きな柱にしてほしいなと思っています。

○**原田委員長**　ありがとうございます。

ほかにございますか。

○**小宮委員**　展示のコンセプトといいますと、昔から、上野の流れとして、分類展示というものがあります。これは、ロンドン動物園が目指していたところです。それから、上野から派生した多摩は動物地理学展示ですね。どこの動物園もこのどっちかをやっていたのだけれども、上野は今世紀にそれをやめてしまったのです。そして、行動展示と生物多様展示と国際動物園というものをコンセプトしてしまったのです。

実は、分類展示も地理学展示も完成しないのです。例えば、多摩が今、面積は７０ヘクタールあるけれども、まだアメリカ園ができていないし、その見通しもありません。そして、上野でクジラが飼えるかというと、飼えません。そういう目標を立てるよりも、もっと一つ一つ説明できることをしたいということです。

行動展示というのは、幸い旭山が有名にしてくれたのですけれども、僕と小菅さんは非常に仲がいいものだから、そんな話をしていて、偶然、一緒に出てきたのです。

それから、生物多様性というのは、いろいろな動物がいて初めて地球が成り立つのだ、

人間だけになってもだめだし、それを展示の中で、上野はそういうことを少しやっています。

国際動物園というのを入れてしまったのは、やはり国立の動物園がないから、例えばパンダでも来てしまうのです。パンダが来たとき、三十何年前、実は前の計画ではあそこはカンガルーを飼うことになっていたけれども、要するにコンセプト、計画があるから新しいものを入れられませんと、あのときは断らなかったわけです。その後も、どこかから象が来たり、どこかの大臣が動物を持ってくる。ですから、国際親善もコンセプトにしてしまえということで、そうすると、あそこの国のものは断るということにならないから、今、上野の置かれる立場で地理学展示とか分類展示とずっと言われていたことにとらわれないでコンセプトを変えてしまったのです。だから、今の円山動物園では北海道がコンセプトというのも僕はいいかなと思ったのです。

○**原田委員長**　飼育動物のコンセプトづくりに、その辺の方向性がＡ、Ｂ、Ｃ、Ｄというふうに四つに書かれています。

Ａがエリアということですけれども、今の生物対応性というのは、触れ合いなどというような意味合いですか。

○**小宮委員**　触れ合いというより、上野は狭いですから、いろいろなことをやるときに、例えばツチブタとナマケモノが一緒にいるのです。ナマケモノというのは南米、ツチブタというのはアフリカですね。だから、普通の動物園の人が来たら、めちゃくちゃなことをしているなと思われるかもしれないけれども、ツチブタは地中に進化した動物で、ナマケモノは樹上に進化しているのです。だから、同じところにいてもバッティングしないのです。しかも、今はナマケモノをおりの外にまで出しています。そのときに、この理屈は何ですかというと、地下に進化したものと樹上に進化したものがなぜ一緒に飼えるかというところから始まって、そういう意味で見てくださいということです。

もう一つは、不忍池で、カワウが非常に大事だということで守った時代があるのです。カワウというのは、東京湾へ行ってえさをとってくるのです。だから、えさを食えてしまえば、２４時間のうち２２時間ぐらい不忍池にいるのです。それでどうなるかというと、東京湾の窒素やリンをみんな持ってきてしまうのです。そこでハスが物すごく繁茂してしまって、ハスと鵜だけの池になってしまったのです。今、池の島にオオワシを１羽放っております。これは散弾銃が入っていて飛べない鷲です。そして、鵜のときはふんで植物が全部だめになるのだけれども、ワシを放したところは植物が復活したのです。

それから、ハクチョウも今まで入れていなかったのだけれども、入れました。これは、植物食だから、ハスの芽を食べてくれないかと。人が２年に１回ぐらいハスを刈るのに５００万円ぐらいかかるのです。ですから、その不忍池の中で生物のバランスがとれて、いろいろな動物がいなければ保てないということをみんなにアピールするとともに、生物のバランスの中でハス刈りをしなくてよくなれば５００万円節約できるわけです。

だから、希少種だからといって、あるものだけを守ったらだめですよということですね。

だから、へ理屈と言われればへ理屈なのだけれども、生物多様性というのはいろいろなところで説明に使えるのです。それは、同じものではなくて、こちらはこちらで個性あるコンセプトをつくったらいいと思います。

上野みたいな動物園は個性が大事だと前に言いましたけれども、本当は上野なんかは個性がない方が、日本で一番古い代表の動物園というのが個性かなという時代もあったのですけれども、やはりそれではだめかなと。

○**原田委員長**　生物対応性ではなくて生物多様性ということですね。聞き間違えました。

今は多様性、多様性というふうに言われている時代だと思いますが、これはさっきの四つの動物園の持っている役割とかなり対応して考えていかなければいけない問題かなと思いますけれども、コンセプトということになると、やはり、それぞれの動物園はコンセプトの上で個性を主張していくということが必要なわけで、どれかにしましょうということではないのではないかなと思うのです。

今お話がありましたように、上野は上野でそれぞれ工夫したコンセプトをおつくりになっているという感じがいたしますが、円山動物園はどのようなコンセプトの方向に行けばいいのか。これは、今、北海道というようなテーマ性で行くというのも一案としてあるというお話もいただきましたけれども、ほかの委員の方々はいかがでしょうか。

○**原委員**　今、北海道ということをコンセプトにというお話がありましたが、一市民として、コンセプトの一つとしてこれは挙げていただけるとうれしいなと思うのは、札幌近郊において、多分、この近くにも野ウサギなどがいると思いますが、原生林があっていろいろな植物がいるのですけれども、生態自体を全く知らないというのが現実だと思うのです。先ほど、動物の中で、例えばタヌキの話ですと、廃止方向にということがあって、人気がないというのが資料の中にもあったのです。確かに、今の展示のままですと人気がなくて、何の存在価値もわかりませんけれども、それが夜行性であって、なおかつ、それが夜になるとこういう行動をするとか、そういう形のようなものが、身の回りでこういうふうに動物たちが生活しているようなものが形づくられていくというか、目に見えるようなものができてくるともっと興味を持ってみんなが見てくれるのではないかという気持ちがあるのです。そういう意味で、せっかく北海道ということであれば、飼育の上で環境が整っているのなら、なおのこと力を入れてみてもいいのではないかと思います。

○**原田委員長**　ありがとうございます。

確かに、動物がたくさんいるのだろうけれども、日常的に余り目に触れないというか、たまに出てきても、目にもとまらぬ速さで隠れてしまうという感じのものもあります。す。そういうような見せ方、この地域、あるいは環境に特化して、それを丹念に大切に見せるという見せ方も確かにありそうな気がします。その地域の動物に親しむ、そういう見せ方があるのではないかなという感じがします。

この辺の見せ方、あるいはコンセプトというところで、ほかの委員から何かございませんか。

○服部委員　A、B、C、Dとせっかくつくっていただいた大変すばらしいコンセプトの考え方ですが、今、皆さん方からお話しいただいたように、どういうステージを描いていくか。それは、いろいろ考え方があろうかと思いますが、それはそれなりにつくり上げていかなければならない。ただ、一つとして、このA、B、C、Dの枠組みですが、やはり喜んでもらわなければいけません。みんながためになったという何らかの宿題を持って帰るなり、あるいは感動を持って帰るなりしていかなければならない。

そういった意味では、レベルの次のページの動物福祉・環境エンリッチメントと出ておりますけれども、大変すばらしい考え方です。生息環境に近づける工夫が必要だということです。アライグマなどを踏まえているのかなと思いますけれども、いわゆる見せ方というよりも、動物がどんなふうに生き生きと１日を過ごしているのか、その中をどのように見せるかということだろうと思うのです。種の保存にしても、すべてそういうことにかかわってくるのだろうと思います。

そういったことをしっかりとコンセプトに置いて、動物福祉をどうしていくのか、動物環境、行動環境をどうするのか。それが行動展示につながっていくのか、あるいは、先ほど小宮委員がおっしゃったように、生物の多様性展示につながっていくのかわかりませんけれども、そんな考え方を持つべきだと思います。そうすることによって、見る人は十人十色で多種多様な見方をしますので、それに対応するには、やはり商品である動物そのものの生き生きとした姿を、例え寝ていたとしても、例えそこでじっとしていたとしても、見せ方によってはおもしろい姿が出てくるのかなと思います。そんなことを、この四つの中に、いわばCの価値・体験ということが大きくクローズアップされるのでしょうけれども、見せ方、育て方、あるいは工夫の仕方を考えいただけばよろしいのかなと思います。

○原田委員長　どうなのでしょうか。私は、これをずっと見ていって、例えばAのエリア別というのは、ここにもタスマニア館という非常に特化した領域を、こういうところにはこういう動物をいるというふうに見せているのはわかるのですが、問題点としては、なかなかその補充がきかないとか、繁殖が難しいとか、いろいろな問題もはらんでいます。こういうエリアにはこういう動物がいるのだよというのを見てもらうというような見方も、どこかひとつ、そういうふうに展開する余裕があるのかなという感じを持つのです。

それから、Bの教材としての重要性ということについては、教材というよりも、やはり環境を大事にしないと生物はどんどん少なくなっていくと。人間が生きる環境というものは人工的にどんどんコントロールが可能であるけれども、生物は自分たちが生きる環境をコントロールできませんので、絶滅していってしまうということを教えていかなければいけない。そういう意味では、Bに書かれている内容というのは非常に重要で、大人が企画をつくって子どもに伝えていくということなのだろうなと思うのです。

そういう意味では、環境教育とか種の保存というようなテーマで、やはり動物園というのはそこだけはきちんと守らなければならない、それが一種の任務である、ミッションであるというぐらいの毅然とした姿勢を見せなければならないと思うのです。

それから、Ｃの触れ合いというのは、体験とか感動ということで、びっくりした、驚いた、おもしろかったというように、動物の知らない世界に驚く。人間とは全く違うわけですから、そういう野性の持っている力とか違いというものに触れてもらうようにする。

ただ、私は、旭山の行動展示に対しては、一つの見せ方といいますか、ああいう見せ方をしたことによってみんな驚いて、びっくりたまげて、うわさがどんどん広がって、それを見にいく、これはすばらしいことだろうと思いますが、そればかりではないのではないかなと思うのです。先ほど、北海道に生きているザリガニの話でも、アメリカザリガニではないよという世界を、ここにはこういうものがちゃんとすんでいるのだよということを子どもが知らないというのは、その土地の子ではないではないかという感じもしてしまうわけで、やはり、こういう驚きを感じてもらうというような見せ方を工夫すべきです。

それからもう一つは、そういう驚きだけでなくて、北海道にはイタチはいるのですね。

○**小宮委員**　あれは、北海道にもいるのですが、外来種です。国内外来種です。本当の北海道のイタチ科はクロテンなのです。テンも外来種なのです。昔は円山でクロテンを飼っていました。本当はそういう魅力を出してもいいのだろうと思います。

○**原田委員長**　日本文化もほとんど外来種なのですけれども、そういう動物と人間とのかかわりを大切にする心ですね。円山動物園は、実際に自分が飼っているわけではないけれども、あの子どうしているかなとか、あのイタチはとか、あのザリガニはとか、私は土地の生き物を知らないのでうまいこと言えませんが、そういう生き物に対して、私はこの子が好きだと。

この前、私の友人が静岡からやって来て、円山動物園に連れて行ったのです。何がよかったかと聞いたら、雪の中だったのですけれども、アザラシがよかったと言うのです。その子は、みずから動物園に行きたいといって連れていったのですが、いろいろ見せて回った後に、「私はアザラシが好き」と言って帰っていったのです。トラもライオンもみんな見て、あの肉を食べるすごさにも目を輝かせて見ていたのですが、「私はアザラシが好き」と言うのですね。そういう子には、アザラシのお姉ちゃんになってもらって、アザラシつきのカードを家族に買ってもらって、その子の記念にそのカードを持ち帰らせる。それで、静岡に帰っても、この子、あの後どうしているかなといったような心のつながりをつくっていくような動物園、それが円山の一つのあり方としてあるのではないかなと私は思うのです。

先ほどのデータでも、札幌市内、それから北海道を含めて８０％ぐらいということで、道内の人たちが多いので、気になったら行ける距離にある動物園なのです。そういう人たちが、みんなそれぞれここへ来たら、どの動物かのファミリーになってもらう、どんどんどんどんその動物のファミリーがふえていくということで、入園者、市民、道民といった人たちがここの動物を支えていく、それによって動物園が支えられる。ただ入場料を払えば見せるよという動物園ではなくて、さっき言いましたように、心のつながりを持たせて帰していくという形で行ったり来たりする、そういう動物園のつながりをつくっていくと

いうことが一つの方向としてあるのではないかと思うのです。

それで、２回目に来たときに、どういうふうにその動物と触れ合えるのか。次にはえさやりができますよという形になるのかどうなのか、そこで何か新しい経験を生み出していくと。つまり、見るだけでなくて、そこでインタラクションを生み出していくような、総合的なやりとりを生み出していくような動物と生き物と人とのかかわりをつくり上げていく。人が絡んでいる、この動物はこんな人たちによってサポートされているということが言えるような動物園になったらすばらしいなと私は考えております。

○**山本委員**　全く同感で、きょうは役割のところの議論が一番多くなるのかなと思っていました。ここをチョイスしていくことで、コンセプトから下が全部決まっていくのだろうなと思ってきょう来ました。

先ほど冒頭にお話しいただいた四つの役割の中で、今、何人かの皆様がお話しなさったように、もう大体一つの道筋が見えてきました。やはり、私たちのお手本は自然界なのだなということをここに毎回来るたびに思いまして、一応、境目があるのですけれども、これほどほかに比べて少ないところもないです。きょうは野球をやっているから声が聞こえたり、その横には神様がいたり、さっき言った川も流れていたり丘もあったりして、この一帯が、本来、こういうところにいなければいけないのだねということを感じさせるのです。私は、まずは札幌の動物園なのだということが役割としてすごく重要なのではないかなと思うのです。

一方、別の角度で言うと、あえて商業施設と言いますけれども、成功しているところは共通性が一つあって、そこに住んでいる人が頻繁に通ってお金を落としていくということがあります。だから、観光客を相手にするのではなくて、結果としてそれはついてくるものなので、まずそこに住む人が何度も通えるようなものであってほしいというところまできょう考えてきました。

ですから、私たちは、この子を見るとか、大人になってもその動物に相談しにくるとか、ふと考えに来る場所というか、そういうところであってほしいなと思うのです。

そうなってくると、展示の仕方も、やたらに飛んだりはねたりする必要がある動物はそうすればいいのですが、とまっているオオワシもすごく語りかけるメッセージがあって、それはそれでいいと思うのです。でも、それが本当は知床の空などで舞っていたらすごくよくて、話を聞くと、ここから旅立っていく姿も将来見られそうですけれども、そういうふうに長いスパンでどんどん好きになっていくというような動物園になってほしいなと思います。そのためのことを私たちも考えていきたいなと思います。

何回か来ると、すごくいいことがあるというのは、これまた商業施設でよくある方法ですけれども、心のポイントをどういうふうに量的にキックバックできるのかというのは、今はまだ解がないのですけれども、それは動物と触れ合って感動することでよくて、安くなるとか何とかということでは決してなくて、ちょっと違う形のお返しがあるというような仕組みづくりになればいいのでしょうね。そこは、自分も宿題で考えます。

○**原田委員長**　私の友人で、まだ札幌に来たばかりなのですけれども、その息子が、ちょっと勉強で息詰まると動物園へ行くらしいのです。そういう世界というのは、小さいころに、ベビーカーに乗せてお母さんたちが連れてぞろぞろと歩くというのとちょっと行き方が違うのではないかなという感じもします。ですから、子どもの教育のためにということではなくて、ある意味では、今言われていた話を聞いてもらいにいくみたいな形で、おれはフクロウにいつも話しかけているのだよというような、そういう光景は実はたくさんあるのです。

私は今、芸術の森にいるのですが、その近くの人が、剥製になっているオオワシのバアサンというのがいて、剥製になってしまったけれども、時々会いにいくのよ、雄々しい姿よねという話をこの前聞かされたのです。だから、本当は生きていればよかったのでしょうけれども、それでもやはり通ってくるのですね。それこそ、本当に動物園と人とのかかわりがずっと生きている姿ではないかなという感じがします。

多分、小さいときに動物とのかかわりということをちょっとでも体験すると、ただ見たというだけではなくて、何か言ったらそれに反応したみたいなものが返ってきたような経験があると、何回か行って、それを大人になっても忘れない記憶になってくるのではないかと思うのです。

○**山本委員**　今の話に触発されたのですが、好きな動物をずっと見続けていたら名づけ親になれるとかですね。

○**原田委員長**　それで、この前、愛称がどれぐらいあるのですか、名前はどれぐらいついているのですかと聞いたら、結構バツが多いので、これはつけがいがあるのかなと思いました。多分、飼育員の方はそれぞれの個体の違いがみんなわかるのではないのかなと思うのです。そういう感じなので、わからないものについてはちょっと目印をつけてもらうなりしてでも名前をつけて、その子の名づけ親になってもらうみたいなものもあっていいかなと思います。

ほかに何かございますか。

○**高木委員**　先ほど自然保護と種の保全という話がありましたが、今、多様性を見せる方法というのはいろいろあると思うのです。既存の動物であっても、おしりの違い、タヌキのおしりはどうだったろうか、タヌキは実に地味だけれども、やはり森の中で歩いている後ろ姿を見るとかわいくて、おしりがちょこちょこ動いたりするわけです。今あるものであっても、しっぽの違いとか足の違いとかというものの多様性の見せ方というのはあると思うのです。だから、種類をふやすだけで、あるいは種を守るだけではなくて、今いる動物の違いみたいなのを常に出すという中で、多様性というのをすごくキーワードにしながら企画を考えていくと、かなり広がりがあると思うのです。身近なものを見据えるというのも、本当は見えないけれども、見せるといった多様性がある。

ですから、多様性というコンセプトはきっちり上げた方がいいと思います。それをどう見せていくか、みんなで知恵を出し合って、市民活動の人に入ってもらったりすれば一番

いいでしょうね。
○**原田委員長**　そうなのです。お猿でもみんな性格が違って、こいつは本当に強そうだけれども、気が小さいとか、みんな違いがあるのではないかと思うのです。多分、飼育員の方はそれをわかっているので、そういうことを教えてあげるというか、これはこうだよという話を聞いて初めて、その猿をまじまじと見ることができると思うのです。そうでないと、単に取り巻いている猿だな、猿がいっぱいいるなみたいなことになってしまうわけです。その一個体に焦点をどう合わせてやるかというのが当初の見せ方なのではないかと思うのです。それをやれるのは、飼育の人しかやれないのではないかと思うのです。だから、それぞれの動物の個性というか、習性というとみんな同じになりますけれども、くせみたいなものも含めて何かうまく伝えられないかなという気もします。
○**服部委員**　そういった意味では、飼育係の経験の豊富な方々に、環境エンリッチメントといいますか、そういったチームを組んで一つ一つの動物の行動を見せてあげられるようにプランニングしていく、そういうことは大変大事な点だと思います。ただ単純に飼育係に全部任せるだけではなくて、特別チームをつくってやっていくといった方法が講じられるのではないでしょうか。
　いずれにしても、委員長がおっしゃったように、共通の機能というか役割というものが大事であることは間違いないと思います。それに対して、動物と人とのかかわりを大事にするというコンセプトができ上がれば、おのずと次の動き方が出てくると思いますので、その辺をきちっとフォーカスしていくということは大変大事だと思っています。
○**原田委員長**　ありがとうございます。
　この前、動物園見学の時間がありました。あのときに、ちょっと裏を通りますかと言われて、裏を通らせていただきました。そのときにすごく感じたのですけれども、この裏と表を引っくり返したらいいのではないかと思ったのです。カバののどをあんな近くで見たことがないわけです。しかし、実際に一般の入園者の方は、向こうの方にいるカバしか見ていなくて、それはなぜかというと、飼育員がいつもえさをあげるのに向こうにいるものだから、向こう側にしかいないのですね。だから、そんなに近くでは見れなかったわけですけれども、裏に回ったら、もうここにいるという感じで、こんなぶっとい歯ですごいということになるわけです。何かその辺の逆転みたいなものを考えていくと、いい見せ方になるのではないかと思うのです。
　この前、私は旭山動物園の小菅園長の講演を聞いたのです。小菅さんはすごくおもしろいことを言っていたのですが、動物園はつまらないとみんなに言われるのですと言うわけです。何でつまらないかといったら、キリンも知っているしとかとすぐ言い出すのだけれども、本当に知っているかというと何も知らないのですよと。キリンの舌がこんなに長いというのを実際にどれだけの人が見ているのか。それから、キリンの角が何本あるかということも知らないというわけです。
　会場には二千何百人くらいいたのですけれども、１本から始まって手を挙げさせていき

まして、結局、正解は５本から７本ということで、私もそんなにあるとは知らなかったです。それは、やはりキリンよりも高いところに観覧席をつくって、上から見ればわかると思いますけれども、そんなのは見たことがないわけで、みんな見上げていますので、角がどこにあるかよくわからないというところもあるのではないかなという気がするのです。そのように、非常に物理的に、視覚的に見えないところをどうやって見せるかというのも大きな工夫の一つではないかと思います。

これは、この四つのコンセプトの中では体験という領域に入ると思いますが、まだまだ余り知らないわけです。大まかに、これはキリンだよ、これはシマウマだよというのはわかりますけれども、実のところ、細かいことは余りわかっていないという世界をどう見せるかというのは、確かにそうだなと納得しました。

○**金澤園長**　そういった部分については、例えば飼育のバックヤード、裏側を見せる部分としては、裏側探検とか、子どもたちだったら１日飼育員というメニューをやったり、それから、この前はカルチャーナイト、それから、８月のお盆の時期にやりますけれども、夜間延長とかという形で、要は、そこをテーマ化していないメニューの方でイベントを組んでいく、それをある種の集客の一つの方法として今は使っているのです。ですから、余り見せてしまうと、今度、お客さんを集める方が手薄になってしまうので、今まさに言われたところを……。

○**原田委員長**　小出しをしているということですね。

○**金澤園長**　そういうことです。切り売りをしながら、お客様を集める方法にも今使っているというやり方なのです。ですから、そっちを見せてしまうと、確かにそれで人は集まるけれども、ある時期を超えると、今言われたようにキリンはもう知っているよの世界に入ってしまったら今度は止まってしまうので、そういうメニューの使い分けしているのです。

○**原田委員長**　動物園は見に行くところだとみんな思っていますけれども、ここの動物園は、クマ館の前あたりに結構広いところが残っているので、あのあたりを青少年キャンプ村にしてしまうと。動物園の料金とキャンプ料金を両方取ってしまえばいいわけで、あそこで過ごしてもらったら、朝に何が起き始めるのか、夜は何がごそごそうごめき始めるのか、１日の動物の行動を体験できるのではないかなと思うのです。そういうふうに発想を変えていくようなコンセプトが必要なのではないかなと思うのです。

だから、檻に囲った動物園の領域と、それから円山をつないでしまえば、檻に囲われない原生林の中の動物も見られる。あそこはリスなどがすぐ出てきますね。ですから、そういうような世界を物すごく身近なものとして見せていく努力というか、やはり仕掛けないとうまくいかないと思いますが、そういうこともあるのではないかと思います。

○**金澤園長**　今の夜に泊まって見るという話ですが、来月、１日お泊まり会というのを考えています。今まで宿泊はやったことがないのです。

そういったいろいろなメニューを入れてみて、どれが将来続けていけるかということで、

お手元の資料３にあるのですけれども、実は、今年になってからどういうメニューを展開しているかということで、今、簡単に言うと実験をやっているのです。

○**山本委員**　お試しですね。

○**金澤園長**　今、この外部委員会を立ち上げることを見込んでいたものですから、春の段階からいろいろなメニューを出していたのです。そうすることによって、見せ方とか、まさに役割の議論にもなるし、集客の議論にもなるし、いろいろ使えるなという趣旨で、この春からやっていたものをまとめて一覧表にしております。

　そういう意味では、今のお泊まり会もそうだし、夜の動物園との組み合わせとか、裏側探検は別ルートでつくってというふうにいろいろやっているのです。

○**服部委員**　既に、人とのかかわりを実践で挙げているという状況のようですね。

○**金澤園長**　一方ではお金をかけるという作業もあるものですから、一番厳しいところがあるのです。

○**原田委員長**　何かキャッチフレーズになるような、円山はこれだよと一言で言えるようなものをつくっていきたいなという感じがします。

○**金澤園長**　今、その資料３の中に……

○**原田委員長**　これは、いろいろとトライアルでやられているということですね。

○**金澤園長**　明日からやるのですが、みんなのドキドキ体験ということで、旭山でいうともぐもぐタイムになると思いますが、ふれあい、えさやり、さらにもう一つは、びっくりするというか、驚きの体験をつくるようにしながら、ちょっと打ち出しをしようと。

○**事務局**　もう投げ込みはしたのですが、まだ記事にはなっていないです。

○**金澤園長**　そういうメニューを出して、今、夏休み中に集中的にやっていこうと考えています。そうすると、さっき言われたような感動の持ち帰りができるかもしれないよねという取り組みなのです。

　とにかく、いろいろなメニューにトライアルしています。

○**原田委員長**　それは非常に重要なことだと思います。

　案の定、余り先に進まないのですが、この辺が一番大事なところでもありますので、余り気にしないで次へ進みます。

　展示動物の方針範囲については、これは我々にどれぐらいのことが言えるかなという感じもしますけれども、ちょっと一歩進めましょうか。

○**大谷委員**　すみません。コンセプトのことなのですが、先ほどからやりとりされていることに全面的に賛成なのですけれども、もう一つつけ加えていただきたいと思っていることがあります。

　これは、ひんしゅくを買うかもしれませんが、ここにいらっしゃる方は大体動物に興味のある方で、動物園も好きという方が多いのですが、そうではない人も動物園に来てもらえるような取り組みも一つ要るのではないかと思うのです。そうすると、ロケーションといえば、札幌で都会ということで、最初にこのお話をいただいたときにちょっと浮かんだ

ことは、例えば本を読むときに顔を上げたらキリンがえさを食べている、動物が主役の動物園であってもいいのだけれども、そうではなくて、そこに来る人たちが遊べる、利用できるスペースで、そこにたまたま動物がいたみたいな、都会だからこそ楽しめるやり方ですね。

○**原田委員長**　それはおもしろいというか、そういう考え方がありますね。

　むしろ、動物園の動物のケージが動物園の入り口の内部だけにおさまっているのも変ではないかと思うのです。動物園のあるエリアであれば、そこからはみ出して歩道にもちっちゃいのがいるぞというように、中にはもっとでかいのがいるというのは当然想像がつくわけですから、そういう助走区間というか、動物の展示の始まりみたいなね。

○**山本委員**　エントランスに何か仕掛けが欲しいですね。

○**原田委員長**　あのエントランスを見てもだれもわくわくしないのです。動物園のエントランスになっていないのではないかという感じがします。初めて来る子どもは、本当にここは動物園なのかと思うのではないでしょうか。やはり、もうちょっと動物がいそうな雰囲気をつくってもいいのではないかなと思います。

○**きくち委員**　私も、誰かが行きたい動物園にしていくということがすごく大事だと思うのです。どうやったら呼べるかではなくて、例えば自分だったらどういうところに行きたいかということがすごく大事だと思うのです。

　さっき、行動展示のことがいろいろありましたけれども、実際、子どもを呼ぼうとしているのか、だれを呼ぼうとしているのかということを考えたときに、今の動物園は、この動物はどこから来たというのを文字でがっと書いてあります。では、子どもはそれを読めるのかというと読めないし、お母さんが説明するのかというと説明し切れない。でも、それが行動で何かがわかると、子どもも目で見て、キリンは高いところの物を食べるのだなということがわかるので、やはりそういうことはすごく大事ではないかなと思います。

　それから、さっきの飼育員さんのことですが、私はブログをやっていて、今回、こういうことをやるということをブログで流したら、たくさんのお母さんたちからいろいろな意見をいただいたのです。やはり、飼育員さんだから知っている何かを教えていただきたいという声が非常にあったのですね。例えば、このゴリラは何を一番最初に食べるのか、えさを与えたときに、これは好き嫌いをしていて、これは一番最後にずるく食べるのだよという話を飼育員さんからもらうと、家に帰って、教育の中でも使っていけのでいいなという意見もありました。

　それから、さっきの本を読めるスペースということでちょっと思ったのですけれども、私は、きょうは４０分ぐらい早く来てしまって、どこか喫茶店はありますかとお伺いしたら、ないのですということでした。私は物を書いたりする仕事をしているので、もしかしたらサル山を見ながらコーヒーを飲んで物を書けたら、もっともっとおもしろいものが書けるかもしれないなということも考えたのです。そのブログの中に、ロサンゼルスに住んでいる人が、ロサンゼルス動物園にはカフェテリアがとても多いですと書かれていて、や

はりそういうことでもいろいろな人を呼ぶと思いますし、行きたい動物園になるのではないかなというふうに思いました。

あとは、それぞれのところでいろいろお話ししようと思っていたのですが、海の中にいる気持ちとか、森の中にいる気持ちとか、プレーリードッグになった気分になるような動物園であってほしいという意見もありました。

以上です。

○**原田委員長**　プレーリードッグというのは何となくわかります。

○**小宮委員**　お客さんの満足度の中で、動物の見せ方を変えてほしいというのが一番多いでしょう。それで、人気度のところで、丸と三角と二重丸がついていて、これで決めつけて、場合によっては変更、あるいはやめたいと書いてありますが、この辺が問題ではないかと思います。

例えば、カワウソは他種に変更も考慮とあります。今、カワウソがいるところにほかのものを入れて、それが非常にいい行動を見せることができるならそれでもいいのですけれども、上野で言うと、カワウソの展示方法を変えた途端に、今は一番人気になっているのです。だから、人気のなかったものをスターにするとか人気者にするというのは、ある意味では飼育係の腕の見せどころだし、自分の動物を自慢できるようにならなければいけないのです。

そのときに、では行動を引き出すのは何かというと、このドキドキ体験の中にすごいのがあるなと思ってびっくりしたのですが、エゾモモンガの飛翔と書いています。動物のことは、物すごくいろいろな本や何かに出ていて、例えばモモンガは飛ぶと書いてあるのに、動物園に行っても絶対飛ぶモモンガは見られないわけです。例えば上野では、今、コウモリが飛ぶ展示をしていますけれども、このコウモリは、夜行獣館の狭いところにいます。コウモリというと、お客さんは夜と飛ぶのを期待して来るのですが、ほとんど日本じゅうの動物園は夜しか見せていないのです。それは、飛ぶためにどうしたらいいかを一生懸命考えるべきだと思うのです。旭山でアザラシがうまくいったのは、アザラシといえば泳ぎだから、それを目の前で見せたということだと思うのです。それぞれ教科書に書いてあるようなことを期待して来たのに、来たら全部寝ていた。それが動物園はつまらないということの原点なのです。物すごく単純なのですよ。

けれども、そんなこと難しいやとなりがちなのです。各論になると、飛ばしてどこかへ逃げたらどうするのかと。だから、先に具体的な話をする前に、みんながあの動物の得意なことはこれなのにというのを何とか見せてやろうと。だから、本州だとムササビがいますけれども、モモンガが飛ぶ展示ができたら、日本初だと思うし、そういうことでいつの間にかマスコミが来るだろうし、みんな見に来ると思うのです。

ですから、人気を決めてしまわないでほしいのです。

例えば、アライグマの人気が三角になっているけれども、福知山の動物園は一番人気です。それは、アライグマが木に登るという習性を見せているからであって、全部人気が出

るはずなのです。

　それが飼育係のやりがいになったときに、お客さんも来てくれて、みんなに聞いたりして、そこにお客さんと飼育係のコミュニケーションが出てくるのです。みんな一律にやろうとしても、飼育係にも個性があって、話すのが嫌いな人もいるでしょうからね。だから、一番いいのは、自分の動物を自慢できるようになったときに、話すのが嫌いな人も話すのではないかと思うのです。失敗してもいいからやってみようと。

　ですから、僕はモモンガは逃げてもいいと思うのです。大陸のモモンガを買ってきてやるのは逃げたらよくないけれども、これは北海道の動物ですからね。でも、まず飼育係に逃げたらどうするのですかと聞かれて、ではよそうということになることがすごく多いと思うのです。

○**金澤園長**　モモンガの場合、広い柵の中だったら十分できます。

　しかも、モモンガは閉園した後なのです。５時に閉めますが、動き出すのはその前後からなのです。だから、日中は巣穴に入っていて見られない状態なのです。それを、今、見せられるような仕掛けを考えているのです。

○**小宮委員**　これは、人気度で三角とかついているのは、みんな夜行性で寝ているものなので、本当は開園中の８時間ではなくて残りの１６時間のときに物すごくおもしろいことをしているはずなのです。

○**金澤園長**　さっきもありましたように、夜行性だけは夜行性でくくりをつくって、中を暗くして、夜昼を逆転させられるような方法が考えられればいいなと、話を聞いていて思っていました。

○**山本委員**　でも、なんかかわいそうだから、夜もあけましょうよ。

○**原委員**　せっかく、タスマニア館にそういうモデルがあるのですから、その延長というか……。

○**山本委員**　私は、自然の時間帯で見たいなというのがすごくあるのです。さっきおっしゃっていたように、こっちが長々といてもいいようなしつらえになっていたら、丸１日動物園にいたらどうなのだろうと、大人だっておもしろくないですか。だから、一緒に朝ご飯を食べたり、昼寝も一緒にしていたり……。

○**小宮委員**　理想的には、２４時間ズーができれば一番いいのです。夜行性習慣なんて要らないのです。人間の方が合わせるのです。そのかわり、夜中の人は入園料５，０００円ぐらい取るとか、夜中に酒を飲んでもいいから１万円取るとか……。

○**金澤園長**　実は、それもやってみるのです。今、夜にお酒を飲みながら見てどうなるかというのを仕掛けてみようかなと。

○**小宮委員**　上野も、８月のお盆の時期に１週間、夜あけてビアガーデンをやります。

○**服部委員**　そういった意味では、この円山動物園にはそういうコンセプトがないものですから、ほとんどの施設が整っていないのです。そういう意味では、やりがいのあるところだろうと思います。

また、例えば食堂一つにしても、３０年くらいメニューをそのまま使っているわけです。うちの子どもが昭和４８年に生まれていまして、そのころは頻繁に来ていたのですけれども、そのままのラーメンであり、そのままのおそばであります。そういう意味では、施設自体も、時代に合ったカフェテリアというのを求めているにしても、セピア色の世界が動物園に漂っているというのはいけないと思います。そこら辺は、もっと意識的に考えていかなければいけないし、改革しないといけない。その延長上に２４時間の動物園が存在してくるのかなという感じがします。

○**原委員**　先ほど大谷委員がおっしゃっていたように、札幌の動物園とどなたかおっしゃっていたと思うのです。札幌の動物園、都会の動物園という中のコンセプトとするならば、私がちょっと考えていたのは、例えば入り口にレストランがあって、そこと動物園がつながっている形で、レストランはレストランで楽しめる場所として、経営もしっかりできるような魅力のあるレストランであれば、それだけでお客さんが来てくれます。その延長で、動物園にも入ってみようか、それが夜であっても、昼間であってもいいわけですが、動物園のレストランではなくて、一つのレストランとして独立したものの延長としてあれば、一つのコンセプトとして札幌市の動物園というものが見えてくるのかなという気もするのです。

○**服部委員**　そうすると、公園的な要素をそのコンセプトにも入れていかなければいけない。そうすると、この動物園の中で買い物するところが何もない。コンビニ一つないわけです。そういう意味で、利便性に欠けるし、公園に遊びに来て、何か飲み物が欲しい、おにぎりがほしいといったときに、そういったものがどこで手に入るのというと、外で買って入らなければいけない。あるいは、お弁当を持って入らなければいけない。そうすると、滞在時間が非常に短くなってくるのです。先ほど、来る前に一回りして売店をのぞいてきたのですけれども、やはりセピアの世界です。時間も時間でしたが、あそこで食べている人はほとんどいません。自動販売機から持ってきてお飲み物を飲んでいる人が多かったようです。そういった、まさに時代錯誤的な施設が存在している。この辺はきっちりした考え方に基づいて改革していかないと、非常にアンバランスになっていきます。そういう意味では、コンセプトをしっかりしていくということは大事だと思います。

○**原田委員長**　確かに、博物館とか……。

○**山本委員**　今、美術館が割とふえていますね。

○**原田委員長**　美術館なら、美術館のレストランに行こうと思うのです。それから、上野文化会館ができたころに、やはり２階にレストランがあって、そこで食べようと。待ち合わせの場所でもあるのです。何かそういう食べ方ができるような、それくらいのレストランをつくったらいいのではないかと思うのです。

非常にいいアイデアだと思うのですけれども、歩いている人は、そのレストランで食べて、そのまま帰ってしまえばいいわけで、券を持っている人、あるいはカードを持っている人は、そこからズーの中に入ってしまえばいいと。そういう二つの流れをそこでとめる

というようなレストランがあって、それで、外側の歩道に、あるいは動物園側にもコーヒーが飲めるような白い丸いテーブルが出ているような雰囲気で、あそこに言ってみよう、動物園へ入らなくても動物園のレストランへ行ってみよう、動物園のコーヒーを飲みに行こうよみたいなものですね。

○**山本委員**　モエレ沼のレストランみたいなものが、もしかしたらイメージに近いかもしれません。

　この前、Ｋｉｔａｒａのそばで３日間だけの、それから、その後、委員長の芸術の森にありましたシェフズガーデンみたいな、すごく自然と一体になったようなありかたもいいのでしょうね。

　そのときに大事なのは、この中の施設を直すのもそうなのだけれども、古いよさもあるから、一つや二つ、レトロなおもしろいものも残したい気もするし、昔はこうだったのだみたいなものがあってもいいのかなと思います。

　それから、円山のまちのものも財産として生かさなければいけないから、この道をもっと歩く工夫をしないと、また車で来て、レストランがよかったといって食べて帰ってというのなら全然おもしろくないので、もっとこの辺の界隈性をきっちり生かすことはできないのかなと思います。

○**原田委員長**　この前、歩行者天国というアイデアが出ていましたが、歩行者天国にしても、ただのグレーの車道ではおもしろくないので、そこにパターンをつけてカラフルなゾーンにしていくとか……。

○**山本委員**　私はゾウの道しか歩かないとかね。

○**原田委員長**　そういうふうについていくわけですよ。

　もう一つ、私が考えているのは、動物園から引っ張ってきてもいいのだけれども、メッシュのケージなのですけれども、それをずっと回して、餌づけして訓練しないと動かないと思いますけれども、カバが通ったり、ライオンが通ったり、人がここを歩いているわけです。それで、「おい、後ろからカバが来たぞ」みたいなね。つまり、動物とすれ違うような動物園ですね。それは道でなくて、園内でもいいのですけれども、園内でも動物が歩き回っていると。ちゃんとケージがついて囲われているわけですけれども、その後に、アヒルがひょこひょこ子どもを連れて歩いているみたいな、そんな世界をダイナミックに、もうあそこにおさまっているという考えはなしに、人と動物が入れまざっているというような世界をつくれないかなと思うのです。

○**原委員**　最近、おりの中の通路というのができましたね。

○**原田委員長**　そういう感じです。

○**山本委員**　この前、トラの側を通ったときに、物すごく感じるものがありました。トラの息をここに感じるというのはすごい経験ですよ。やはり、ああいうのがないとだめなのでしょうね。

○**服部委員**　北海道神宮の門の上で、毎朝、リスさんがえさを食べています。それをみん

なが眺めているのです。そういう自然との触れ合いがこの周りにもしっかりと描かれているのです。ですから、今、委員長がおっしゃったように、やはり動物園の外に出すというのも一つのアイデアで、いわゆるエントランスをどうするかということだと思います。

○**山本委員**　それは本当に大事ですね。

○**服部委員**　例えば、円山地域、エリアを一体化した考え方にしていかなければいけないのでしょうね。

○**原田委員長**　神宮と動物園と円山公園と、それから円山ですね。大倉山シャンツェまではちょっと遠いかもしれませんけれども、そのあたりは一体化すると。

　ですから、入場料もある意味ではフリーで入れるようなルート、それはちゃんと動物も見れるけれども、そのルートは山へ登るルートで、回遊式でみたいなことがあってもいいのではないかと思います。この塀からこっちは動物園といったような考えではない、ちょっと柔軟なエリアにする。公園という意味では、いつもお金を払わされるというのはちょっと困りますけれども、その辺をうまくやれば何とかできるのではないかという感じがします。

　円山エリア全体というのは余り反対する人はいないかなという感じですけれども、それはもう絶対やめた方がいいというようなご意見のある方いらっしゃいますか。

　上野動物園は、不忍池もほとんど動物園という感じなのですか。

○**小宮委員**　三つに分かれて、３分の１です。

○**原田委員長**　不忍池の３分の１ですか。

○**小宮委員**　大きな池の中の３分の１は動物園が管理しています。

○**大谷委員**　先ほど公園というお話が出ましたけれども、私は１回目をさぼってスウェーデンに行ったのです。そこに、スカンセンという野外博物館がありまして、北欧で一番古いのですけれども、そこには動物園があって、博物館があって、そこに古民家を移築してきているのです。展示だけでなくて、入れるし、ボランティアの人が古い格好をして何か作業をしているというような体験型で、いろいろな文化の集積がそこへ行けばわかるというとてもいい施設でした。ですから、もちろん１日遊べるし、カフェもあるし、菜園で何かつくっていたり、円山エリア一帯を使って、そういうふうに多角度的に、札幌の力みたいなものがそこへ行けばわかると。

○**原田委員長**　ぜひそういうのをやりたいのです。

　スウェーデンですか。

○**大谷委員**　スウェーデンです。

○**原田委員長**　私は、９月の末に国際会議でスウェーデンに行くのです。ぜひ寄ってこようと思います。

○**小宮委員**　スカンセンミュージアムという有名なところです。

○**高木委員**　冬に、札幌市から助成をもらった観光プロモーションで、園の横からスノーシューで藻岩山に上がって馬の背まで行くということを、雪まつりの期間に１週間やった

のです。そこを登ってすぐのところに物すごいハリギリがあるのです。ほとんどの人が知らないのですけれども、その下はすぐに動物園の檻があるのです。もうちょっと上がると、うわっと１００万都市が広がるのです。ああいうものももう少しうまく生かせたらおもしろいなと思います。

○**服部委員**　円山動物園の中は坂になっています。ですから、ロケーションのいい場所がたくさんあると思うのです。もう少し動物園自体を見つめてみると、いろいろな発見ができて、いろいろな改革ができるのかなと思います。

○**原田委員長**　円山というのは私物なのですか。市のものではないのですか。

○**金澤園長**　山そのものですか。

○**事務局**　山は国です。基本的に、道がある程度管理の義務を負っています。まち場の方は札幌市の持ち物で、公園と一体のものという位置づけがあるのです。

○**原田委員長**　まち場とは何ですか。

○金澤園長　東側を向いた方です。頂上から見て札幌が見える方です。

○**事務局**　下の円山公園と一緒の位置づけです。

○**山本委員**　円山の丘の顕著な特徴は、冬でも犬の散歩をする人が極めて多いのです。私はこの冬、実は２０回ぐらい登ったのです。その前は、近くの三角山に行ったのですけれども、うちの犬を連れて上がろうとしたら、犬禁止と書いてあって、でも２回ぐらい登ってしまったのですが、動物を一緒に散歩したり、アウトドアしたりしたいのです。円山はそれがオーケーで、みんな来ているのです。すごく親和性が高くて、いいところだなと思ったのです。そういうことをできる場所は、都会であればなかなか制限されてしまうのです。

○**高木委員**　垣根のすごい鉄の塀が見えるわけです。それでぱっと分断されているから、それにもう少し意匠性を持たせるとか、一体感を持たせるといいかもしれませんね。

○**原田委員長**　では、円山をつなげるのはそんなに難しくないのですね。

○**金澤園長**　そうですね。

○**原委員**　天然記念物になっているのです。

○**金澤園長**　天然記念物だから、木を切ったりはできないのです。

○**原田委員長**　切らなければいいわけでしょう。

○**原委員**　切らない、持ち出さない、踏み荒らさない、持ち込まないです。

○**原田委員長**　大丈夫ですよ。

○**金澤園長**　動物園の中からも直接上がっていこうと思ったら上がる場所があるのです。

○**山本委員**　やっぱりあるのですね。

○**金澤園長**　人が歩くのは大変ですけれどもね。

○**山本委員**　でも、そういうところがおもしろいのですよ。

○**金澤園長**　ところが、その途中にいっぱいヘビがいるのです。

○**小宮委員**　私は、東京から見ていると、北海道のイメージがあるから、皆さん牛や馬にはなじんでいるのかと思ったら、この前、きくち委員が、１８０万都市になってしまうと、普通の子どもたちはそういうのにもなかなか会えないのだと言われて、びっくりしたのです。

例えば、日本に昔からいた対馬の馬は、４０年ぐらい前は５，０００頭ぐらいいたのに、今は２６頭しかいないのです。どさんこも、今はたしか２，０００頭ぐらいになっています。ですから、使い道がなくなると、あっという間にいなくなるのです。

ここのコンセプトのＤに伝統・歴史・経験・原点というのがあるので、ただどさんこを飼う、あるいはばんばでもいいと思うのですけれども、そういうのを飼って見せるということはどこかがやっていそうだけれども、やはり、どさんこをどうやって使っていたのか。山で雪を切り出してそれに乗せるとか、ばんばみたいなもので耕すとか、そういうことができる人がまだ何人か残っていると聞きます。そういう開拓使に結びつくようなものですね。博物館などはレプリカとか動かないものを見せるわけですが、そういう特徴というか北海道の原点であるどさんこやばんばを本州の人が見たいな思ったときに、どこか遠くのところを探し出すより、この大都会で東京から飛行機でちょっと来て見れるといったら相当な魅力になるのではないかと思います。

だから、北海道の開拓を支えてきた動物たちがいるので、その実物、そして使い方も札幌の円山動物園に残したら、僕はすごく評価されるような気がするのです。コンセプトのＤに書いてあったので、ちょっと気になったのです。

○**原田委員長**　ありがとうございます。

○**きくち委員**　馬や牛がいない理由はあるのですか。

○**事務局**　これは一つの考え方ですけれども、とにかく珍しいものを集めようということで始めたのが円山動物園で、その流れは引き続いているということだと思います。ですから、家畜というのは円山動物園にはという考えがあったのだと思います。

○**小宮委員**　円山動物園は、もともと北海道民のための動物園みたいなところがあったと思うのです。それで、帯広市も旭川市もできてきたので、やっぱりこっちの特徴も出していい時代になったのではないかなと思います。

それから、今、日本の動物園で馬が３００頭ぐらい飼われていますが、その馬というのはポニーなのです。３００頭のうち２５０頭がポニーです。これは、上野もその原因をつくった一つで、在来馬をやめて、小さくてかわいいポニーを選びました。こんな小さい馬は本当はおかしいのです。

ここにもポニーはいるのですか。

○**金澤園長**　ミニホースがいます。

○**小宮委員**　馬があんなに小さいというのはおかしいと僕は思うのです。

在来馬が２５頭、競馬上がりが２５頭ぐらい、残りが全部ポニーになってしまっているというのは、日本人がずっとつき合ってきたものを捨ててしまって、おもしろいものとか、

小さくて飼いやすいとか、それは手抜きではないかなと思うのです。これは、日本の動物園全体が反省すべきことです。だから、ポニーの分だけでも、特に地域の家畜がいるのだったら、かえていった方がいいのではないかなと思っています。

○**金澤園長**　馬だったら使いようがあるかなと思っています。それこそ冬は馬そりに使えるし、夏は観光馬車があるくらいですから、そういう使い方は不可能ではないですね。ただ、農業に使えるかといったら、それは使う場所がないです。

○**小宮委員**　こういうやり方をしていたということです。機械のつけ方とか、それは今、みんな博物館へ行って、生きた馬と切り離されてしまって、多分、あと何年かたったらだれも使えなくなってしまいます。今、まだ使える人がいるうちに、一つの特徴を出してはどうかと思います。

○**原委員**　すごくおもしろい話だと思います。円山は、お年寄りだけではなくても、坂が多いので冬は登るのがすごく大変なのですが、どさんこが馬そりで運んでくれたら楽しいかなと思いました。

○**金澤園長**　それこそ、さっき出ていたアプローチだって馬車でやれるわけです。

○**服部委員**　地下鉄から動物園まで馬そりで送り迎えをする。

○**山本委員**　それはみんな乗りたいですね。

○**小宮委員**　それは、サービスではなくて、ちゃんと有料にすると。

○**山本委員**　スノーシューのコースと馬そりコースを……。

○**原委員**　そういうのは楽しいですね。

○**小宮委員**　だから、その馬はポニーとかサラブレッドは使わないでほしいのです。北海道の開拓の歴史を残した馬たちを使って、残してもらいたいのです。多分、どんどんいなくなってしまうと思うのです。今は、牛の乳搾り経験などもきっとしていないと思います。

○**服部委員**　地下鉄から動物園までの馬そりをシャトルバスがわりにしたら、それは受けると思います。一番環境にいいわけですから、環境教育の上でもおもしろいコンセプトですね。

○**きくち委員**　それこそ、あだ名をつけてやったら、人気者にもなりますね。

○**原田委員長**　これは、本当に実現したらいいのではないですか。

　私も、なぜ馬がいないのかなと実は思っていたのです。でも、黒っぽい馬のような生き物がいましたね。

○**大谷種の保存担当部長**　小さい馬で、品種改良をしたミニホースと言います。

○**金澤園長**　ミニホースとシマウマはいます。

○**原田委員長**　いわゆる北海道らしさというか、この地域らしい動物がここにいないと、あとはどこにいるのだということになります。

○**小宮委員**　何か新しいことをやろうとしたときに、みんな、そんなものは無理だよと言います。例えば、多摩でライオンバスをつくったときに、あのときの園長はほとんど反対されたそうです。都庁にも、そんなことをして危ないではないかと。本人はアフリカに行

ったことがあるから、ライオンは寝ていて起こすのは大変だろうなと。それを押し切ってやって、ライオンの中にバスを入れたというのは、サファリという意味では一番最初です。葛西でマグロを泳がすのも無理だろうと言われた。今でも葛西だけですからね。

ですから、どこもやっていなくて、具体的にしようと言ったときにみんなが無理だ無理だと言うことを実現すると、それは歴史に残るような、あるいは人を呼ぶようなものになるのです。しかも、ただおもしろいということではなくて、やはり思い切ったことをやらなければいけないと思います。

○**原田委員長**　実は、きょうの課題抽出につきましては、１５時２０分までということでしたが、今は１５時２５分なので、ちょっとオーバーしてしまいました。

このように、一人で考えていてはなかなか出ないようなことも、いろいろな方の意見に引きずられてアイデアがわいてくるということもあります。この検討については、次回にも継続させていただきますが、次は、そういう課題の検討とともに、では、どうしたらいいのかという具体的な提案の内容も含めながら議論をしていきたいと思います。

きょうの討議はこのあたりで終えておきたいと思いますが、ちょっと時間が中途半端ですね。本当はもうちょっと続けた方が本当はいいかなと思うのですけれども……。

○**小林委員**　一言いいでしょうか。

きのう、テレビ放送で第１回目の様子が流れていました。見ていて、大変な行事だなと思っていたのですが、きょうは楽しく聞かせていただいて、ついつい発言する機会を失ってしまいましたので、この次は少し勉強してきたいと思います。

それで、先ほどビール園の話題が出ていました。学校で私がこういうことを言うとハラスメントに引っかかりそうですけれども、ここは一委員として、そういうような機会があってもいいのかなと思いました。

○**原田委員長**　それでは、岡田委員もきょうは何もご発言がないようですので、何か一言ございませんか。

○**岡田委員**　私は、なかなか口を挟めなかったのですけれども、本当に北海道らしい動物園というのがコンセプトとして一番ふさわしいのだろうなと思います。市民が何回も来たくなるような動物園というのは、やはり動物たちが生き生きしていて、身近に感じられるようなところだと思います。本当に、動物園の中にいる動物だけではなくて、身近なところではシマリスとか、知床に行けばオオワシもいるというふうに広がりを持たせるような、想像力をかき立てられるような、そういった動物園になればいいなと思いました。

具体的なことについては、また考えてきたいなと思います。

○**原田委員長**　ありがとうございます。

大川委員はいかがでしょうか。

○**大川委員**　きょうのこの２時間の中で、これだけどんどん意見が出てきて実感したことなのですが、動物園というのは、子どもさんが楽しむのはもちろんですけれども、同時に大人の感動も引き出させるものであるべきなのだなということと、今は大人もすごく楽し

みたがっているのだなということをすごく感じました。

普通の動物園ですと、子どもさんを動物園に連れていって、子どもが何かに感動している姿を見て、大人も、ああよかったなと感動するのですが、それは大人自身の感動ではないわけです。大人が何かを見て感動しているのではなくて、子どもを通して感動を共有しているところでとまっているのですけれども、それを今度は、大人も積極的に、むしろお父さんが行きたいから一緒に行こうというようなレベルまで引き上げていければいいのかなと思います。そういうふうにするためには、さっき出てきたようにハード面ですね。長時間の滞在に耐えられるレストランとかカフェを整備するところや、特にエントランスを整備することで、大人も興味を持って、体験して、何かをたくさん持って帰れるようにするのがゴールなのかなと感じました。

○**原田委員長**　ありがとうございます。

○**服部委員**　これは大きな問題をはらむと思いますけれども、きょうずっと回ってみて、カラスが多過ぎるのです。カラスを駆除するというところまでは考えていませんけれども、カラスの害を入園者が考えておられるのだろうか。やはり、カラスも動物ですから、このように共生しているのがいいのか。しかし、パークとして見たときに、繁殖期などは、私も何回かカラスのすぐそばを通って攻撃されたことがあるので、相当危険性が高いのです。そういった意味では、何か害がないのかどうかを知っておきたいですし、それをどうすればいいのかということも考えなければいけないという問題もあるかと思います。

○**原田委員長**　今まではどうでしたか。

○**金澤園長**　カラスの害は、たくさんあると言うと怒られてしまいますが、実はたくさんあります。今言われたように、まさに子育ての時期は威嚇してきます。実は、食べているものをぱくっと盗んでいきますので、お客さんにも直接の害があります。ふんの害は余り聞いていませんけれども、やはり食べているものを横どりしていくというのは結構言われています。

それから、動物園に直接影響する部分としては、うちが動物に与えているえさは、カラスがいなくなると１割から２割助かるのではないかなと思うぐらいです。もともとカラス山の中に動物園がありますので、どっちが先かと言われたら何とも言えないところがありますが、夕方は非常に気持ち悪いぐらいカラスがいます。

動物にとっても、巣づくりのときは毛を抜いたりされますから、うちは春先から余り人の邪魔にならない程度にネットをかけますけれども、冬は雪でネットが切れますからとるのです。そんなこともあって、カラス対策は何とかしたいと思っています。

○**原田委員長**　あのネットはそのためなのですか。

○**金澤園長**　そうです。あれは魚網なのですけれども、カラス対策なのです。

○**服部委員**　上野動物園さんは、徹底的にハトにえさをやらないでくださいということで、監視員がチェックしておられましたね。

○**小宮委員**　あれは、東京都全体で、公園でハトにえさをやるのを禁止にしたのです。カ

ラスも都として捕獲――捕獲方法は上野でやっていた方法を使っていまして、正式に駆除をやっているのです。

○服部委員　やはり、ある程度の駆除をしないと、ちょっと大変だなと思います。

○金澤園長　野生動物なので、北海道へ行って許可をもらってこないとやれないのです。

○服部委員　思い切ってやることでしょうね。

○山本委員　今日はこれで終わらざるを得ないと思うのですけれども、この手のもので１回２時間というのは確かにきついかもしれません。勝手なことを言って済みません。いろいろ事務的なことがあるのでしょうし、私もきょうは次があるので厳しいですけれども、１回、ずっとやってしまった方がいいのかなと思います。東京からいらしている小宮委員にすごく申しわけがないです。

○原田委員長　私も、ちょっと時間が欲求不満なのです。

○小宮委員　僕は、８月は来れないのですけれども、９月は前の日から来ようと思っています。

○山本委員　夜からにしますか。

○金澤園長　本当は、こういう会議を昼間にやって、その後、懇親会をやると、そこでもうエンドレスで出てくるのです。ですから、そういった機会が必要だなと理解しています。先ほど小林委員から言われた話は、次回か、その次ぐらいに１回セッティングしたいなと思います。

○原田委員長　前回は、自己紹介的なニュアンスが非常に強かったですし、どんな視点でということでした。ただ、これを実際に検討して、今度は絞り込んで、それから解決策へということになってきますと、これはちょっと終わらないです。もうちょっといろいろな視点からの意見が欲しいと思いますので、物理的に時間が短過ぎるという感じがします。疲れ切っているというわけではないので、次回、あるいはその次は少し時間を長くしていただければありがたいと思います。

それでは、きょうはこのあたりで終了させていただきますが、次回の議題としましては、前回資料が配付されておりますけれども、第３回委員会は構想の検討ということになっております。この課題を含めて、こういう動物園にしたらどうかという構想色を強めながら、いろいろご議論いただきたいと思っております。

私も、次の時点ぐらいで、私自身のイメージをビジュアルに表現してみようかなと思っています。

それでは、その次以降のスケジュールにつきまして、事務局からご説明いただけますか。

○金澤園長　次回は８月２８日の月曜日になります。

ただ、今、ご意見がありましたので、スタートは１時半からですが、終わりはちょっと延ばします。会議室をしっかり押さえておいて、多少延びてもいいように準備させていただきたいと思います。次回は、課題の抽出なり整理ということになりますが、多分、追加の資料はないと思いますので、資料の説明がないと頭からいきなり議論ができるかなと思

います。ひとつお願いしたいと思います。

３．閉　　会

○**原田委員長**　それでは、委員会はこれで終了ということで、この後、園内視察があるのですか。

○**金澤園長**　この後、お手元に化石探検学覧会という招待券がございます。これは、向かいの動物科学館で今やっております。４時半までやっておりますので、もしお時間があったら見ていただきたいと思います。これは、ＪＴＢさんが主催しているものなのですが、タキカワカイギュウとかサッポロカイギュウというもののレプリカを見せております。それこそ北海道に大昔住んでいた動物なので、ひとつごらんいただければと思います。ただ、動物といっても骨だけです。

今日は大分ご意見が出されましたので、私どももすごく整理しやすくなってきたかなと思います。だんだん形が見えるようになる予定です。いろいろなアイデアもいただきましたので、検討して、できそうなことは整理をつけていこうかなと思います。

きょうは、本当にどうもありがとうございます。

以　　上